

ヤシの葉から紙へ
—ネパール写本研究ノート—

安 江 明 夫

学習院大学文学部研究年報 第58輯 抜刷 (平成23年度)
Off-printed from The Annual Collection of Essays and Studies,
Faculty of Letters, Gakushuin University, Vol. 58 (2011)

ヤシの葉から紙へ

—ネパール写本研究ノート—

安江明夫

はじめに

本誌 57 輯掲載の「ヤシの葉写本研究ノート」¹⁾ で筆者は、書写支持体（以下、「支持体」という）として世界文化史上、パピルス、 parchments、紙と並ぶヤシの葉の特徴、歴史、書写方法等を考察した。稿中、ネパールはインドの影響を受け早い時代からヤシの葉写本を制作している旨を述べたが、ごく僅か触れたに過ぎなかった。またヤシの葉から紙への支持体の変遷事情についてはインドの例を記すにとどまり、ネパールほかに触れることができなかった。

脱稿後、機会を得てネパールで写本の実地調査ができ、合わせてそれらの物理的特性—特に支持体と形態—に関する文献・目録調査を行った。以下、同調査の結果を報告する。支持体ヤシの葉及びその紙への変遷を中心としており、先稿の続編でもある。

1 ネパールの写本遺産

ネパールは豊かな写本遺産で知られる。残存する写本数量を正確に把握するのは難しいが、例えば大規模なネパール写本保存事業「ネパール・ドイツ写本保存プロジェクト」(Nepal-German Manuscript Preservation Project. 以下、NGMPP という) は²⁾ 18 万点以上のネパール写本のマイクロ化を実施している。NGMPP がマイクロ化できなかった写本が数多くあり、また、ネパール国外に流出した写本も少なくない。そうしたところから全体としてのネパール写本遺産の豊かさを推し量ることができる。

他方、ネパールの写本群には大乘仏教のサンスクリット語写本が多数、含まれる。サンスクリット語仏教写本は仏教が衰退したインドでは消失しており、ネパール仏教写本は初期大乘仏教の内容を知る上でつとに特別に重要と認められている。

大量の残存写本の支持体は殆どが紙である。量的にはヤシの葉がそれに次ぎ、さらに銅板、樹皮を支持体とする写本も残存する。ヤシの葉、銅板、樹皮はいずれもインドで使用された支持体素材である。

残存写本におけるヤシの葉写本の比率は小さい。前記 NGMPP の後継計画である「ネパール・ドイツ写本目録作成プロジェクト」(Nepal-German Manuscripts Cataloguing Project. 以下、NGMCP という) による目録データベース中のヤシの葉写本はインド語系写本³⁾のものとして現時点で約 3700 件であり⁴⁾、インド語系写本全体(現時点で約 11.5 万件)に占める比率は 3%程度である。一方、次に述べるアーシャ・アーカイブズ所蔵写本においても、インターネット公開目録⁵⁾ 所載 7025 点写本のうちヤシの葉写本は 85 点で、比率として 1%を少し超える程度である。但しアーシャ・アーカイブズの場合、目録未公開の巻き型ヤシの葉写本(後述)を含めると写本全体におけるヤシの葉写本比率は 10%を超える。

紙写本に比べて数量的に少ないとはいえ、ヤシの葉写本は紙写本に先だって制作され、歴史的、文化的に貴重である。セシル・ベンドール(Cecil Bendall)が 1889 年にカトマンズ旧王宮で発見したヤシの葉写本には 5 世紀～7 世紀に遡るとされる仏典があり、これは伝世仏教写本として、また伝世ヤシの葉写本として、世界最古と見なされている⁶⁾。

一方、ネパールでは、北接するチベット文化の影響を受け、良質の紙が比較的、早い時期から製造された。ネパールではロクタ・ペーパーと呼ばれることが多いが、この紙はダフネ⁷⁾(学名 *Daphne cannabina*) 即ち沈丁花科樹木の樹皮を紙料とする点で素材としては和紙と同類である。耐久性に優れた良い紙で、それが最初の千年紀から製造されたと推測され(後述)、とりわけ 17 世紀以降、ネパール写本の支持体として大量に使用された。

ネパールでは、自然災害、戦乱のほか、14世紀のイスラム侵略、写本文化の担い手ネワール族の民族的・文化的受難など、政治的、宗教的に困難な歴史が続いた。にもかかわらず、概略、写本は永く、良く保存されてきた。一般的にその理由として、1) 写本は宗教行事の折などに使用され、人々の生活のなかで大事に保護されてきた、2) コリハヤシの葉、ロクタ・ペーパーなど耐久性の良い素材が使用された、3) 比較的温暖・乾燥の気候が写本の長期保存に寄与した、が挙げられている。

以上を序として、以下、カトマンズでのフィールドワークと文献・目録調査に基づき議論を進める。

2 アーシャ・アーカイブズの写本コレクション

2.1 アーシャ・アーカイブズ

ネパールの主要文書遺産機関として、公立の国立公文書館、国立図書館、教育省附属ケーシャ図書館、トリブバン大学図書館及び民間のアーシャ・アーカイブズ (Asha Saphu Kuthi)、マダン図書館 (Madan Puraskar Pustakalaya) を挙げることができる。上記はすべてカトマンズ盆地に所在する。文書類はそのほか、寺院、個人宅で多く所蔵されている。

ネパールの文化—特に写本文化—はその多くをカトマンズに定住したネワール族に負っている。言い換えれば、ネパール写本文化はネワール写本文化と重なり、カトマンズ盆地への集中度が高い。

筆者は上記6機関を、2010年12月、文書遺産保存の観点で訪問し、また2011年4月にアーシャ・アーカイブズで短期間、写本調査を行った⁸⁾。

アーシャ・アーカイブズ⁹⁾は、1986年、ネパール写本を散逸・消失・海外流出から防ぎ、国民の遺産として保存する目的で設立された民間アーカイブズである。同アーカイブズに対し、ネパール写本保存の重要性を強く認識した日本の仏教資料文庫が、設立準備の1970年代以来、収蔵施設の建設、目録作成、資料のマイクロ化・デジタル化、画像データベース CD-ROM 頒布等で多大の支援を実施して今日に至っている¹⁰⁾。

筆者の同館での資料・データベース調査は、アーシャ・アーカイブズと仏教資料文庫の尽力を得て実施したものである。

2.2 アーシャ・アーカイブズの写本

アーシャ・アーカイブズは現在、主として寄贈により入手した1万点余の写本を所蔵する。同写本群はその性質上、「書物」と「記録」に区別できるので、以下、書物写本と記録写本に分けて考察する。書物写本は宗教、文芸、医学、歴史等の分野に関わり複製物が多い。一方の記録写本は組織業務上あるいは個人生活上などで発生する文書・記録類で、基本的に唯一である。

上記2つの写本群に分けてアーシャ・アーカイブズの現在の所蔵資料を見る。(ほかに受入れ作業待ち受贈資料が相当数ある。)

A 書物写本

A1：5309点

A2：1716点

B 記録写本

B1：巻き型写本 1201点

B2：細折書簡 (未整理) 約50点

上記A群はポータィ (pothi)・ヤシの葉写本 (写真1参照) とその体裁を踏襲した紙写本及び折本 (現地名 *thya saphu*) で構成される。ポータィは日本では貝葉装または梵挾装と呼ばれる。折本は紙を折った状態でポータィと



ほぼ同形。日本では折本のほか折本装、経折装等と呼ばれる。

A群の写本目録はアーシャ・アーカイブズと連携

写真1 ヤシの葉写本
(アーシャ・アーカイブズ所蔵資料／筆者撮影)

するロータス研究センター (Lotus Research Center) ホームページ¹¹⁾ から検索できる。そのうち、A1 セクションは写本画像がデジタル化され、CD-ROM 版が頒布されている。A2 セクション写本もデジタル化されているが、日本では頒布・提供されておらず、それへのアクセスは現在、アーシャ・アーカイブズ館内に限定される。

A1 セクション写本の内容について、同資料群を調査した吉崎一美 (ネパール仏教研究者) は次のように解説している。

「(アーシャ・アーカイブズには一筆者) 開館の時点でおよそ 5300 点の古写本がある。それらを宗教的に分類すれば、ヒンドゥ教系が 40%、仏教系が 35%、非宗教系が 25% と推定され、また言語別ではサンスクリット語文献 70%、ネワール語文献 25%、ネパール語その他が 5% と推定される。」¹²⁾ 内容的に宗教写本が多く、言語的にサンスクリット語及びネワール語写本が多いことが伺える。

一方、B 群の記録写本は巻き型写本と細折書簡である。

巻き型写本 (素材はヤシの葉及び紙) の所蔵は 1201 点で、写本目録が用意され、写本自体もデジタル化されている。但し現在は、目録検索、デジタル画像閲覧ともにアーシャ・アーカイブズ館内に限定されている。

一方の細折書簡は 19 世紀の「ネワール商人のラサ (チベット) からの書簡」で、所蔵点数は約 50 点。支持体は薄手でネパール製伝統紙とされる¹³⁾。片面筆記で、それを折本のように山、谷と順に 2cm 程度に細く折り、終わりに紙紐で縛り、それに蠟で「封」をしている。細折書簡は現時点では未整理資料であり、小稿では取り扱わない。

書物写本は宗教、歴史、文学、医学等の内容を著すことが多く、所蔵者により大切に取られてきた。それと異なり行政文書、売買契約、公私の書簡等の記録写本は、業務上、生活上の必要がなくなり、特別に歴史的に重要と見なされなければ廃棄されるのが通常である。しかしそれらが極めて重要な歴史資料となり得ることは言うまでもない。その点、アーシャ・アーカイブズの B セクション写本は価値が高い。また受入れ作業待ちの受贈資料にも

ヤシの葉から紙へ (安江)

記録写本が多く見られるようであり、今後の作業の進捗が期待される。

3 ヤシの葉写本

3.1 ネパール写本のヤシ種

インドでは紀元前の早い時期からヤシの葉が支持体として用いられた。ネパールでも仏教伝来の4～5世紀頃から写本が存し、その支持体はヤシの葉が主流だったと推測される。

インドで使用されたヤシの葉は主として以下の2種のヤシから採取された。

- ・パルミラヤシ (別名: オオギヤシ、ウチワヤシ、学名: *Borassus flabellifer*)
- ・コリハヤシ (別名: タリポットヤシ、学名: *Corypha umbraculifera*)

ではネパールの支持体ヤシの葉種は何であったか。先稿で詳述したがヤシ種の識別はヤシの葉の生産地、写本の時代性、資料の保存性等に関係するので重要である。そこでアーシャ・アーカイブズのポーティ・ヤシの葉写本を対象に、支持体のヤシ種を観察してみる。

インド写本学に優れた業績を遺したハーンリ (A.F.R. Hoernle) はコリハヤシの葉とパルミラヤシの葉の特徴を「コリハヤシは概して薄く、細い葉脈が走る。幅3.8cm～7.5cm、(通常、4.5～6.4cm)、長さ40～100cm前後」「パルミラヤシはアバタ状のマークがあり、概して厚い。幅4.5cm以下(通常、3.8～5cm)、長さ通常40cm以下」¹⁴⁾としている。葉の厚さ、柔軟性、葉脈の有無などからコリハヤシとパルミラヤシの識別は実物を見れば容易である。

今回の現地調査でアーシャ・アーカイブズ所蔵の85点全件に当たることを期したが、諸事情でそれは適わず、実見は数点にとどまった。それで数点の実見と画像データベースによる85点全件の画像写真から推断するのだが、アーシャ・アーカイブズのポーティ・ヤシの葉写本の支持体は殆どすべてがコリハヤシの葉である。

この推断をネパール・ヤシの葉写本全体に拡張することは妥当だろうか。管見の限り、ネパール・ヤシの葉写本のヤシ種に関する調査はない。それゆ

えここでは次に、上述ハーンリによるインド写本調査結果からネパール・ヤシの葉写本を抜き出して紹介しておこう。

ハーンリは同論でヤシの葉写本に使用されるヤシ種の時代変遷を主テーマとし、そのため紀年（写本の書写年）の明確な 356 点のヤシの葉写本を分析した。その対象にネパール写本が 45 点含まれるので紀年順に並べて表 I とした。（表 I 中の「表 I」はハーンリの実見調査、「表 III」はハーンリの目録調査。支持体項目の C はコリハヤシの葉のこと。）

表 I ネパールの有紀年ヤシの葉写本¹⁵⁾

	表+番号	紀年	支持体	横幅 cm	縦幅 cm		表+番号	紀年	支持体	横幅 cm	縦幅 cm
1	I 5	1008	C	53.3	5.1	24	I 40	1356	C	28.6	5.1
2	I 6	1014	C	32.4	5.9	25	III 81	1360	C	33.0	5.1
3	I 7	1015	C	54.6	5.4	26	I 41	1364	C	31.8	4.4
4	III 1	1039	C	53.3	5.1	27	I 43	1372	C	51.1	6.0
5	III 3	1065	C	53.3	5.1	28	III 84	1374	C	40.6	5.1
6	III 4	1068	C	27.9	5.1	29	III 85	1380	C	34.3	5.1
7	I 9	1071	C	57.8	5.7	30	III 86	1384	C	22.9	5.1
8	I 10	1078	C	45.7	4.4	31	I 44	1385	C	34.3	5.1
9	I 11	1084	C	30.5	5.1	32	III 87	1386	C	33.0	5.1
10	I 17	1130	C	?	5.1	33	III 88	1389	C	30.5	5.1
11	I 20	1165	C	40.6	6.4	34	III 90	1392	C	33.0	5.1
12	I 22	1166	C	57.2	5.1	35	I 46	1395	C	33.7	4.8
13	I 23	1167	C	27.9	5.1	36	III 94	1412	C	31.8	5.1
14	I 24	1179	C	30.5	5.1	37	III 95	1412	C	30.5	5.1
15	I 26	1198	C	31.8	5.1	38	III 96	1425	C	33.0	5.1
16	III 20	1199	C	30.5	5.1	39	III 97	1427	C	25.4	5.1
17	III 24	1205	C	53.3	5.1	40	III 98	1429	C	29.8	5.1
18	III 57	1261	C	29.1	3.8	41	III 99	1440	C	30.5	5.1
19	III 60	1264	C	33.0	5.1	42	III 100	1457	C	30.5	5.1
20	I 33	1286	C	33.0	5.7	43	III 102	1463	C	30.5	5.1
21	III 70	1302	C	33.0	5.1	44	III 114	1576	C	24.1	5.1
22	I 38	1331	C	30.5	5.1	45	III 119	1619	C	30.5	5.1
23	III 80	1355	C	30.5	5.1						

ハーンリは 19 点を実見、26 点を目録により考察したが、その結果、45 点すべてのネパール・ヤシの葉写本の素材をコリハヤシの葉と判定した。表 1 からすれば、ネパールでもコリハヤシの葉が早くから用いられ、少なくとも 17 世紀前半頃まではそれのみが使用された、が結論となる。筆者のアーシャ・アーカイブズ所蔵ヤシの葉写本の観察結果と重なる。

以上から、ネパールのヤシの葉写本素材は主としてコリハヤシの葉と結論できそうだ。しかし、果たしてそうか。

ネパール・ヤシの葉写本のヤシ種について述べる文献は少ないが、次の 2 点から関連箇所を引いておこう。

ネパール仏教写本の保存を論じた Min Bachadur Shakya は「(ネパールでは) コリハヤシの葉は薄く柔軟性に富むので書写及び絵画に用いられた。11 世紀初頭から 17 世紀はパルミラヤシの葉が写本に用いられた」¹⁶⁾ と述べている。またアーシャ・アーカイブズ所蔵巻き型ヤシの葉写本の保存処置を行ったアジア文化財保存修復会 (日本の NPO) は、「コリハヤシの葉とパルミラヤシの葉の両方が見られる」¹⁷⁾ としている。Shakya は論拠を示さず、後者は巻き型ヤシの葉写本に限定しての論述である。とはいえ上記 2 点は重要な所見を表している。

筆者及びハーンリの調査結果と上記 2 点の見解は食い違う。その点を考えてみたい。先稿で筆者は、インドのヤシの葉種に関し、ハーンリは残存ヤシの葉写本を対象に考察したために判断を誤ったと記した。コリハヤシの葉は柔軟性、耐久性に富み、そのため重要で永続性が期待される宗教写本等にはそれが用いられた。他方、パルミラヤシはその点で劣るので、世俗文書等に用いられた。そのためコリハヤシの葉写本が多く残り、パルミラヤシの葉写本はあまり残らない。そうした事情があれば残存写本のみを対象に使用されたヤシ種を歴史的に判断するのは適切ではない。以上がハーンリの見解に対する筆者の考えの要約である¹⁸⁾。この考えがネパールにも該当しはしないか。即ち、耐久性に富むコリハヤシの葉は重要で長命が期待される宗教写本等に用いられた。アーシャ・アーカイブズ所蔵資料の多くが宗教写本であり、お

そらくハーネリ調査対象（表1）も同種の重要な「書物写本」である。とすればそれら写本の支持体が（主として）コリハヤシの葉であるのは当然と言えないか。一方、パルミラヤシの葉は世俗的文書など短命な用途で使用され、残存することが少ない。また重要な写本コレクションに含まれず、保護されることが少ない。

インドのヤシの葉写本では、その歴史の初期から、コリハヤシの葉とともにパルミラヤシの葉が用いられたのではないかと筆者は推測した。ネパールでも同様だったのではないかと。使用の比重、世紀別の差異などはあるにしても、ネパールではコリハヤシの葉とパルミラヤシの葉の双方が支持体ヤシの葉として併用された、がより妥当な考えではないだろうか。この点は、今後、国立公文書館等での実見調査、多くの記録写本を包含する NGMPP マイクロ・コレクションでの資料調査等がなされ、検証されることを期待したい。ネパール写本学さらにはインド写本学にも寄与する成果がそこから生まれよう。

なお付加すれば、コリハヤシはネパールに生息せず、その葉はすべてインドからの輸入品である。パルミラヤシはネパール南部の一部で生息するが、そこで支持体を調製した痕跡はないようだ。パルミラヤシの葉もインドからの輸入品と考える。この点は小稿の後段（6節）で重要となる。

3.2 ヤシの葉の横幅

アーシャ・アーカイブズのヤシの葉写本について吉崎（先述）は「ネパールでは、著しく横長で二穴をもつ貝葉写本には、古代まで遡るものがあるのに対し、横幅がない一穴の貝葉には、時代の下がるものが多い。これは古代の貝葉写本は、インドから輸入したターラ樹葉を用いたのに対し、中世からはネパール国産の代用品が現れ、長大な樹葉が確保できなくなったためという説がある」¹⁹⁾としている

吉崎が説くように、ヤシの葉の横幅は11世紀制作のものには50cm程度の長い写本が多いが、以降は30cm程度と短くなっている。（表1参照）しかしそれは「ネパール国産の代用品」使用が理由ではないはずだ。なぜなら、

ヤシの葉から紙へ（安江）

まず、ハーニリの示した 356 点の有紀年ヤシの葉写本には西インド、ベンガル、ビハール制作の写本も多いが、それらのヤシの葉の横幅もネパール制作のものと同様、時代が降ると横幅が短くなっている。横幅短小化はネパールだけではない。そして次に、「ネパール国産の代用品」なるものはない。

とすると 12 世紀以降にヤシの葉写本の横幅が短くなるのは、素材自体でない別の理由によるのではないか。例えば、横幅は 30cm 程度の長さの方が読み易く葉をめくるのが容易、持ち運びも楽で収納も簡便。こうした実際の、機能的な要請が支持体の横幅が短くなった理由ではないだろうか。支持体のサイズは素材、製造方式とともに機能性によっても左右される。

そこで次の問題。短めのヤシの葉シートをどのように用意したか。ヤシの幼葉の主脈を除いた半葉から支持体シートを調製するが、通常は、半葉から 1 シートを用意すると考えがちである。葉丈の短いパルミラヤシやニツパヤシではそうであろうが、葉丈の長いコリハヤシでは事情が違うのではないか。ハーニリも「時にコリハヤシの葉を横に半裁した」²⁰⁾と記している。

コリハヤシの葉のサイズを表 1 で見ると、縦幅は制作の世紀に関わらず殆どが 5cm 強である。一方、横幅は 11 世紀には 50cm を超えるのが普通だが、12 世紀以降は 30cm 前後の写本が多い。これは調製後の横幅の長いヤシの葉の裁断の仕方を変えたからではないだろうか。例えば横幅 1m の調製後ヤシの葉を 2 分すれば 50cm 幅のシートが用意できる。これを 3 分すれば 30cm 強のシートが用意できる。このように横長シートの裁断方法を変更し、より機能的な横幅 30cm 程度の短いヤシの葉シートを用意したのではないか。

以下、補足的に書記法についても簡単に記しておく。

ヤシの葉写本への書記法は、大きくは、1) 竹（あるいは木）ペンなどを使いインクで書くペン書き法、2) 尖筆で葉に字を刻み、その後刻んだ溝にインク等を差し入れる線刻法、に分かれる。北インド、中央インドでは古来、ペン書き法が採用されたが、ネパール・ヤシの葉写本の書記法も同様でペン書き法である。線刻法は見られない。またポーティ・ヤシの葉写本はその両面に書記した。ペン書き法とその道具は支持体がヤシの葉から紙に替わって

も保持された。ポータビ形の紙写本はヤシの葉同様に両面書記である。

4 ヤシの葉から紙へ支持体の変遷

アーシャ・アーカイブズの目録データベースを活用し、表2にヤシの葉と紙の支持体別に有紀年写本を世紀別に整理した²¹⁾。表2には合わせてネパール写本に関する3件の調査、即ち小西正捷（インド研究者）によるケーシャ図書館写本コレクション調査（ヤシの葉と紙）²²⁾、ハーンリ調査（ヤシの葉）²³⁾、NGMCPデータベース²⁴⁾ 活用の筆者整理（ヤシの葉と紙）の結果を付した。NGMCPは現在、進行中で検索可能な目録データは全体の一部である。その点でサンプル的だが、データ量が大きいので時代動向を知る上で、現時点でも有用と考えて付した。

表2 ネパール残存写本の支持体／世紀別（19世紀末まで。単位：点数）

支持体	ヤシの葉				紙		
	アーシャ・ アーカイブズ	ケーシャ 図書館	ハーンリ 調査	NGMCP	アーシャ・ アーカイブズ	ケーシャ 図書館	NGMCP
8C							1
9C		1					5
10C							17
11C	1	4	9	32			4
12C		16	7	71		1	1
13C	2	14	4	88			
14C	2	24	15	126	1	2	1
15C	2	25	8	176	1		7
16C前半	1	11		87	6	7	36
16C後半	1		1	57	15		80
17C前半	1	6	1	67	46	17	167
17C後半		3		53	161	44	224
18C前半		1		40	191	40	456
18C後半				15	182	24	490
19C前半				6	390	47	630
19C後半					441	34	583
計	10	105	45	818	1434	216	2702

残存ヤシの葉写本の書写年代を見ると、アーシャ・アーカイブズ、ケーシャ

ヤシの葉から紙へ（安江）

図書館、ハーソリ調査ともに15世紀までが隆盛で、のち徐々にその使用が減少し、17世紀前半までに使用がほぼ終了している。NGMCP データベースからも同様の傾向を見ることができるが、しかしここからは17世紀後半～19世紀前半においても、数は減少するがヤシの葉が支持体として使用されたことが見てとれる。

ヤシの葉支持体使用の減少は紙使用の増大と反比例の関係にある。紙支持体の写本自体はNGMCP データベースで見ると8世紀に早くも使用され、その後の9～11世紀にも比較的、少数だが紙写本が見られる。小西調査にも12世紀、14世紀の紙写本が示され、アーシャ・アーカイブズにも14世紀、15世紀の紙写本が見られる。しかし11世紀から15世紀までは紙支持体は少数、ヤシの葉支持体が圧倒的に多数である。16世紀に入ると紙支持体が一定数、見られるようになり、次いでヤシの葉と紙の使用比率が逆転するのは16世紀後半、17世紀以降は紙支持体が主流となる。残存写本を観察した限りではあるが、要約するとネパールでは16世紀以降に支持体として紙使用が普及し、17世紀前半がヤシの葉から紙への転換期、以降は紙写本の時代と言える。

以上は表1の穏当な解説と考えるが、しかしこの理解は先行の所説と同じではない。

ネパールの紙を研究したトリアー（J.Trier）は「我々は（コペンハーゲンのネパール・コレクションのこと―筆者）12世紀初頭以降のネパール紙写本を所蔵している」と述べ、「ネパール写本は、カトマンズ盆地地域では、16世紀半ばまではより好まれたヤシの葉に、それ以後は殆ど排他的に使用された紙に記された」²⁵⁾としている。ケーシャ図書館の写本素材調査を実施した小西も「1540－1550年ころには、それまで一般的であった貝葉に対し、紙本文書がそれにとってかわる」²⁶⁾と述べ、トリアーと同様の見解を記している。

しかしアーシャ・アーカイブズ、ケーシャ図書館、NGMCPの紀年写本の年代分布を見ると、トリアーの説く「16世紀半ばまでは」は「16世紀中は」

に、また「それ以後は殆ど排他的に使用された紙に記された」は「それ以降は、大半は紙に記された」に書き換えられるべきと考える。ヤシの葉から紙への転換は16世紀半ばとするより17世紀前半とするのがより適切であり、かつそれ以降も紙が「排他的に使用された」のではない。

5 巻き型写本

アーシャ・アーカイブズには現在、1173点の巻き型ヤシの葉写本があり、そのほか28点の巻き型紙写本がある。幅2.5～4cm程度の細長い片をリボンのように巻いた写本で、通常3～4行の横書き文が書記されている。



写真2 巻き型ヤシの葉写本

（左：閉じた状態。右：開いた状態。左端が粘土印章。アーシャ・アーカイブズ所蔵資料／筆者撮影）

同写本群の保存処置を実施したアジア文化財保存修復会は「現地の言葉でタムスクと呼ばれるRPLM（Rolled Palm Leaf Manuscript）は、非常に珍しい独自の巻物形態をもつ泥封印付貝葉写本で、内容は13世紀から17世紀にかけてのカトマンズ盆地内の主に土地所有に関する社会文献」²⁷⁾と報告している。吉崎（先述）は「（以前一筆者）この古文書館（アーシャ・アーカイブズのこと一筆者）にはさらに約1000点の貝葉写本があるが、それらは未整理のために閲覧できなかつたと報告した。その後の調査によって、それらは主として、剥いだ木の皮などに土地売買の契約証文などを記し、丸く巻きあげた上で、ワックスのシールで封印したものと判明した」²⁸⁾と説明している。

ヤシの葉から紙へ（安江）

上記2つの説明及び『プロイセン文化財団図書館所蔵ネパール写本目録』解説²⁹⁾からタムスク (tamusk) と呼ばれる巻き型写本は土地・家屋等売買の証文（法律文書）とわかる。これはAセクション資料と異なり、内容により写本が特定形態を有する事例である。他方、支持体については見解が分かっている。また何より写本の形態が特異である。これらの点を順次、検討してみよう。

5.1 タムスクの支持体

タムスクの支持体は幾らか風変わりである。筆者はアーシャ・アーカイブズで数点の実見調査を行い、かつ画像データベース上で数多くのタムスクを観察した。そこから言える一般的特徴は、1) 形状が細帯のように長く、しかも曲がったものも少なくない、2) 横幅1mを優に超える長さの写本がある（ポーティ・ヤシの葉写本で1mを超える例は殆どない）、3) 広げた写本の左右両端あるいは片端の縦幅が短いものがしばしば見られる、4) 葉の厚さが0.22mm程度と薄い³⁰⁾（ヤシの葉支持体としてもっとも薄いコリハヤシの葉は0.28mm～0.3mm程度）、5) コリハヤシに特徴的な葉脈は見られない、である。

普通のヤシの葉とは大分、様子を異にする。吉崎が記すようにこれは樹皮なのだろうか。良く知られるように北インド、北東インドで白樺あるいは沈香（学名 *Aquilaria agallocha*）の樹皮が支持体として使用され、ネパールでも一部の地域でそれが用いられた³¹⁾。だが、巻き型写本の支持体はそれらとは違う。

観察の結果、筆者はこれをヤシの葉、しかもコリハヤシの葉（が殆ど）と判断した。しかしタムスク支持体とポーティ形コリハヤシの葉の物理的特徴は随分、違う。それをどう説明するか。

ヤシの葉支持体は一般に、一葉のヤシの幼葉から中央の主脈を取り除き、縦幅の短い両端を切り離し、この半葉からシートを1枚あるいは複数枚用意する。（図1参照）タムスク支持体はその残り片の活用ではないだろうか。

ヤシの葉から紙へ（安江）

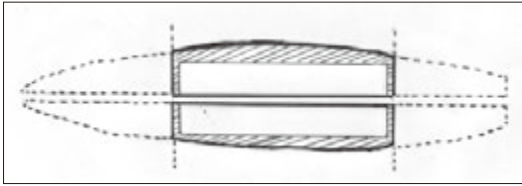


図1 支持体ヤシの葉の調製
(図は概念図。斜線部がポータティ調製後の残り片。)

残り片と推理すると、上述の疑問への答えを見いだせる。葉中央の主脈から離れれば、それだけ葉の厚みは薄くなり、かつ葉脈は細くなる。

形状が長細く粗雑である、片端あるいは両端が短いものがある、横の長さが時に1mを超える、の理由も図示した残り片の有効活用であれば理解しうる。

そして使用年代をみるとポータティ・ヤシの葉写本もタムスクも17世紀頃まで、と同時代性を示している。残り片の活用であれば、ポータティ・ヤシの葉写本の制作が減少すればタムスク制作もそれに従って減少するのが当然だ。

巻き型写本には、ヤシの葉のほか紙を支持体素材とするものがある。アーシャ・アーカイブズでは同形態の写本を28点所蔵しているが、そのうちデジタル化済みで調査可能な写本25点の紀年を見ると、1659年が最古、1898年が最新である。世紀別では17世紀が7点、18世紀が4点、19世紀が13点。(1点は紀年不明)すべて17～19世紀制作である。即ち、ポータティ・写本のヤシの葉から紙への支持体変遷と巻き型写本のそれとが符合する。これはタムスクの素材をヤシの葉と判断する傍証となろう。

5.2 タムスクの形態と印章

タムスクの形態及び付された印章(写真2右)が興味深い。次にこの点を考察する。

まずタムスクの形態。パピルス、絹、紙等の巻物(卷子本)は少なくないが、タムスクのような細片巻き物は珍しい。この形態はどこで生まれたのか。ネパールに特有のものか、それとも周辺地域にも見られるものか。タムスクのルーツを探った研究はなさそうだ。

次に印章。この素材を吉崎はワックス(蠟)としているが、大半は蠟では

ヤシの葉から紙へ（安江）

なく粘土である³²⁾。蠟の使用は世界的には中世ヨーロッパ以降とされる。ネパールでも蠟が印章に使用されたが、これは少し後代になってから。ちなみにアーシャ・アーカイブズ B2 セクション「細折書簡」（19世紀）に付された封は、先述のとおり、すべて蠟である。

タムスクに付された印章の役目は何か。アジア文化財保存修復会も吉崎もこれを「封印」と説明しているが、それは正しくない。細切りヤシの葉の紐を文書に縦に回してその上に粘土印章を付しているの、体裁は「封印」である。しかし写真2に見るように印章は文書末尾に付され、文書を封緘していない。つまり「封印」ではない。ではこの印章は何のために付されたか。そして、こうした印章のルーツはどこに求められるか。

粘土印章は古代のエジプト、メソポタミア、インダスなどで用いられ、インドでも古くから用いられた。世界の印章史を考察した新関は「古代のインドで書写材料として用いられたのは主として樺の皮や棕櫚であったが、文書の内容を秘匿する必要がある場合にはまるめて紐でしばり、結び目に粘土をかぶせ、そのうえに印章を捺した」³³⁾としている。また古代インドの印章を研究した Thaplyalha は加えて、1) ヤシの葉文書の粘土印章では、そのために必要な紐は、通常、ヤシの葉でつくった、2) 粘土印章を封としてではなく文書の権威性保持、真正性保証のために文書末に付したことがあった³⁴⁾、と記している。タムスクに引きつけて要約すれば、インドではまるめたヤシの葉写本に、文書の権威性保持または真正性保証のため、ヤシの葉製の紐を文書末に回し粘土印章を付したことがあった、となる。

とすると、インドで採用された印章様式がネパールに伝わり、法律文書等を整えるために付されたと考えられないか。アーシャ・アーカイブズの印章に似た大きさ、形状の印章がインドに多く見られる³⁵⁾。

そして、と想定を続けるのだが、粘土印章と同様に巻き型ヤシの葉写本の形態もインドからネパールに伝えられたものではないか。

粘土印章と異なり、巻き型ヤシの葉写本がインドに存在した史的証拠はない。しかし、諸文献から以下を拾い上げることができる。1) 同形（細片・

巻き型)の金属板(金板、銅板など)文書の残存例がある³⁶⁾。金属板文書はしばしばヤシの葉文書の形・サイズを模倣して作成された。とすれば巻き型金属板文書に先立ち、巻き型ヤシの葉文書があった可能性がある。2) 細片ヤシの葉の文書末に粘土印章を付した例が残存する³⁷⁾。これはネパール国王からのもの(17世紀)だがインドの典型例として紹介されている。3) インド古記録に抛り「(粘土印章を付したあと—筆者要約)ヤシの葉は巻かれ、紐で結ばれた」³⁸⁾と記すものがある。

十全ではないが、上記をヒントとし、インドで巻き型ヤシの葉文書を作成した可能性を探り当てることができる。そしてネパールはインドから、おそらく粘土印章と一緒に、同文書様式を摂取したとする推測に道が拓ける。古代・中世期ネパールはインドの強い文化的・社会的影響力の元にあり、写本文化に限っても言語、文字、書法、支持体(ヤシの葉、樹皮、銅板など)、写本形態(ポータィ)、とネパールはインドに負うところが大きい。その可能性はある。

しかしそうなら、インドで巻き型ヤシの葉写本が確認されないのはなぜだろうか。

その理由は、まず一般的に、用済みになれば処分される記録写本は残存しにくい。重要で永続を期待される文書には金属板、石板、石柱等を使用した³⁹⁾とあるから、ヤシの葉、特に残り片を使用しての文書は長命を期待されない類のものだったのだろう。そのうえインドの気候条件はヤシの葉や樹皮等写本の長期保存を困難にしている。粘土印章付き写本もインド残存は耐久性のある印章のみで、文書(ヤシの葉など)自体が残っている場合は殆どない⁴⁰⁾。インドとネパールの史料保存条件の差は大きい。さらにイスラム化後のインドでは、文書支持体も文書様式も大きく変化し、伝統が漸絶した。

上記の理由で巻き型ヤシの葉写本はインドでは確認されない。一方、インドから巻き型の形態、粘土印章を摂取したネパールは同文書様式を長く堅持し、その結果、一部のタムスクが現存している。——以上は推測の域をでないが、今後の研究課題として記した。

6 支持体変遷の理由

4節で、ネパールで使用される写本支持体は、概略、17世紀にヤシの葉から紙に移行したと述べた。この変化が近接インドの写本事情と関係することは、両国間の広範囲の交流から容易に推測される。

ハーンリはインドでは紙は「中北部では13世紀半ば、西部では14世紀半ば、東部では15世紀半ばから使用され始めた。（中略）中部、西部ではそれ以前に使用されたヤシの葉、樹皮支持体が完全に紙に替わった。東部では比較的最近までヤシの葉と共存して使用された」⁴¹⁾としている。

インドの製紙と紙使用はイスラム文化の影響を受けている。西インドで早くに紙が使用された例が認められているが、これは西インド・グジャラート商人が交易のなかでイスラム文化を摂取したもの⁴²⁾。より広範囲な紙使用はイスラム教勢力がインドに伸張する13世紀初め頃からで、それがインドにおける紙使用に大きな影響を与えた。そしてインド全体の製紙及び支持体としての紙使用の画期は、イスラム教徒のムガル朝が1526年に興ったこととされる。当初のムガル朝の版図は中央インドで、それが拡大し、17世紀には南インドを除くほぼ全土に及ぶことになる。イスラム圏では8世紀以降、支持体には紙を採用しており、それが支配者文化としてムガル朝インドに浸透した。インドの支持体をヤシの葉から紙へと移行させた大きな要因としてムガル朝イスラム文化があり、インドに製紙業が盛んになるのもムガル朝時代である⁴³⁾。

ただ事情はインドの地方ごとに多少、異なる。ムガル朝の版図は中央インドに始まり、北インドの制圧、さらに東、南への侵攻と進んだ。それに従い、中央・北インドではムガル朝の支配下、ヤシ（特にコリハヤシ）の葉から紙へと移行したが、ムガル朝支配の及ばない南インドでは支持体として従来のパルミラヤシの葉を使用し続けた。即ち、支持体の変遷、紙の製造・使用の普及はイスラム支配と密に関係し、ハーンリが（イスラム支配が強固に及ばなかった）東・南インドで19世紀までヤシの葉は紙と併用されたと記すのはその現れである。また、ネパールに近い北東インドのビハールや西ベンガ

ルでヤシの葉が紙に替わるのは 17 世紀で、これはネパールと同時期である。

以上を記して話を戻すと、ネパールは当然、インドの写本事情の影響を受けた。ネパールでのヤシの葉から紙への支持体変遷がインド（特に北東インド）と同時期であることがそれを示している。しかしそれほどのような影響だったのだろうか。

この問いは奇妙かも知れない。長年、ネパールは南隣の大国インドの文化的影响を受けてきており、この場合もインドの影響が見られて不思議はないからだ。けれどもインドで紙使用が普及したのはイスラム文化の浸透による。イスラム化しなかったネパールで、なぜ支持体をヤシの葉から紙へと移行させたか。そこに問いが生ずる。

その問いはイスラム支配を受けなかった南インド、イスラム文化の影響を受けなかったインド近接のスリランカあるいはミャンマーの場合を見れば、一層、明らかになる。これらの地域・国ではネパールと同様にイスラム文化が浸透せず、それゆえ 20 世紀に至るまでヤシの葉を支持体として重用した。ミャンマーでは 13 世紀頃から紙写本（パラバイツ）を制作したが、書物写本にはヤシの葉をより正統的な支持体として用い続けたという⁴⁴⁾。

ネパール同様にイスラム文化の浸透のない南インド、スリランカ、ミャンマー等ではヤシの葉使用が 20 世紀まで続いた。一方、ネパールではそうではなかった。なぜだろうか。上記の地域・国とネパールを隔てるものは何か。

端的に言ってそれは支持体ヤシの葉の生産だと筆者は考える。南インドもスリランカ、ミャンマーも自地域内で支持体ヤシの葉を生産した。ネパールはヤシの葉調達をインドに依存した。その点が違いである。南インド、スリランカやミャンマーのように自地域で支持体ヤシの葉を生産・調製していれば、ネパールの写本支持体史は自ずと異なったものとなっただろう。

支持体がヤシの葉から紙へと変遷した際、ネパールは大国インドの影響を受けた。しかしそれは文化的、技術的なものではなかった。イスラム文化の影響で北・中央インドで使用されなくなったヤシの葉支持体は、その生産が徐々に衰退し、それに伴いインドからの輸入に依存していたネパールでは支

ヤシの葉から紙へ（安江）

持体ヤシの葉の調達が困難になった。そこで支持体をヤシの葉から紙に替えた。しかしそこにはイスラム化したインド写本文化の影響は見られない。

ではネパールの紙写本文化は、どのように生まれ、発展したのだろうか。

7 製紙法と紙写本形態—チベット文化の影響

7.1 製紙法

インドのヤシの葉生産事情がネパールの支持体変遷に大きな影響を与えたが、紙写本そのものでは北接のチベットが大きな影響を及ぼした。なのでチベット写本の支持体事情をまず一瞥しておく。

チベットにもヤシの葉写本が多く保存されているが、その殆どはインドあるいはネパールから請来されたものとされる。インドから地理的に離れたチベットでは、ヤシの葉調達は困難だった。そこでチベットでは、7世紀に中国から伝播したとされる製紙技術⁴⁵⁾により、早い時期から紙を支持体として用いた。

チベットの製紙法は澆紙法⁴⁶⁾で、水槽に浮かべた紙簀に紙料液を注いで紙層を形成する。そして水切り後に簀ごと天日干しなどで乾燥させる。日本で主流の流し漉き法、西欧等で主流の溜め漉き法に比して言えば「注ぎ込み法」である。素材は瑞香狼毒（学名 *Stellera chamaejasme*、和名クサジンチョウゲ）の茎・根（の内皮）が主とされる⁴⁷⁾。

ネパールの製紙法もチベットと同じ澆紙法で、ただし素材はダフネなどの樹皮。素材的にはこの方がチベット産より品質の良い紙ができる。

現ネパール領の古い紙漉き場は殆どがヒマラヤ山系にあり、地理的にチベットに近い。そしてそれらはネパール・インドとチベットを結ぶ交易ルート上にある⁴⁸⁾。ヒマラヤ南麓にはチベット系民族が定住し、つまりそこはチベット文化圏とも言える地帯。しかも同地域では紙素材となるダフネが豊富に採取できる。紙はこの地域では農閑期の重要な交易生産品となりえた。8～9世紀は勢力を誇るチベットがネパール含む周辺諸国に大きな影響力を持った時代である。こうした諸事情を考え合わせると、8～9世紀頃、現ネパー

ル領のヒマラヤ南麓地帯で製紙が行われていたと推測できるのではないかと。

しかしそこで生産された紙一少なくとも支持体としての紙⁴⁹⁾一は、市場のあるラサ（チベット）に向けて出荷されたことだろう。ダフネを素材とするブータン紙は良質のものとしてチベットで重宝されたとされるが⁵⁰⁾、ネパール紙も同様にラサなどで質の良い紙として消費されたに違いない。一方、カトマンズ盆地では、ヤシの葉の供給がある以上、支持体素材としての紙を必要としなかった。需要があれば交易ルートを南に下ってカトマンズに紙を供給するのは容易だったのだが。

インドの一般的な製紙法はチベット、ネパールの製紙法と異なる。ムガル朝イスラム文化のもとで製紙が発展した影響で、製紙法は溜め漉き法一紙液漕から簀で紙料液を掬いあげ、のち水切りした湿紙のみを乾燥させる一が一般的である。また材料はイスラム・ペーパーと同じく亜麻等の古布が主流。加えてイスラムの製紙法では小麦澱粉でサイジング（滲み止め）を施し、それによってインクが滲まない、裏移りしない支持体を用意したが、インドも同じで小麦または米澱粉をサイジングに使用した。（チベット及びネパールの紙はサイジングしない。）インド紙は製法も材料もイスラム製紙技術に拠っている⁵¹⁾。

7.2 紙写本形態

チベットの紙使用の歴史の一端は、敦煌写本中のチベット語写本で知ることができる⁵²⁾。そこにチベット語写本が見られるのは、チベット（吐蕃王朝）が8世紀後半～9世紀半ばに敦煌を占領したことによる。敦煌写本中のチベット語写本はすべて紙が支持体で、ヤシの葉はない。そして、その殆どがポータティ形である。中に少数だが折本さらには綴じ本もみられる。写真3のようにヤシの葉写本を模倣し、紐で綴じるための孔を描いた紙写本がポータティ、折本双方に見られる。孔はポータティ形紙写本でも使用されておらず、折本の場合は一紙葉が繋がっているのも一孔は不要である。にもかかわらず孔を付した（時には描いた）。仏教を崇めたチベットでは、支持体として紙を用い

ヤシの葉から紙へ (安江)

る際にも、インド由来のヤシの葉写本形態を権威あるものとして踏襲した。このようにチベット紙写本には、紙葉のサイズ、紙厚、書記方式、写本形態にヤシの葉写本の影響が濃厚に見られる。チベットでは紙は、調達が難しいヤシの葉の「代用品」だったと見てとれる。

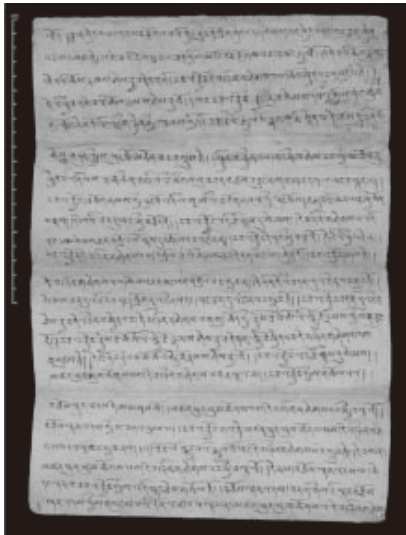
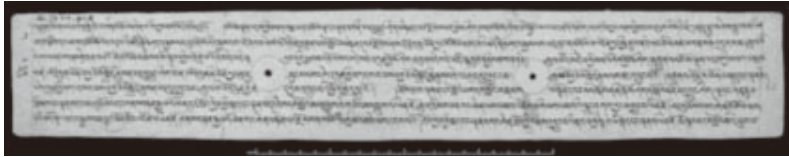


写真3 敦煌文書中のチベット紙写本（ポータィと折本）
（英国図書館所蔵。上：IOL TibJ4、下：IOL TibJ617。写真はIDP(注52)データベースより。）

ヒマラヤ南麓（現ネパール領）で8～9世紀頃には製紙が行われていた可能性については既に記した。ネパールで古くから紙が知られていたことは、表2に8世紀、9世紀の残存紙写本が示されること、アストシュ美術館（インド）に1050年紀年ネパール紙写本が所蔵されていること⁵³⁾などからも推測できる。ただヤシの葉が調達できた間は、ネパールでは紙は多用されなかった。

そしてネパールはヤシの葉の調達が困難となり支持体をヤシの葉から紙へと移行させた際、製紙等で古くから影響を受けてきたチ

ベットの紙写本文化を摂取した。チベットでは7世紀に紙をヤシの葉の「代用品」として使用したが、ネパールでも紙は一時代は17世紀以降と降るが一調達が困難となったヤシの葉の「代用品」だった。

ネパールの紙写本形態は初期にはポーティ、その後の大半は折本である。また少数だが糸綴じ写本が見られる。書記方法は既に述べたようにポーティでは両面書記だが、折本では片面書記が基本、糸綴じ本では両面書記である。すべて敦煌写本中のチベット語写本に見られる形態と書記法である。

もう1点加えると、ネパールでは木版印刷が行われ、アーシャ・アーカイブズ所蔵資料にもそれが数点、NGMCP 目録データベースでは365件⁵⁴⁾を検索する。木版印刷本の刷年を見ると、それらの殆どが19～20世紀である。チベットでの木版印刷開始は15世紀初めと推定されているが⁵⁵⁾、それがネパールに伝播し、採用されたのは大分遅れてのようだ。1721年にラサからカトマンズを訪れたキリスト教宣教師は「彼ら（ネパールの人々）は（中略）印刷をまったく知らない⁵⁶⁾」と書き残している。17世紀にネパールがヤシの葉から紙へと支持体を移行させた際は、木版印刷を受容していない。印刷には彫る、刷る技術のほか、一定数の複製本の需要、刊本製作の資金、頒布体制等が必要となる。また「手書き」の伝統を離れる意思も必要である。ネパールでは19世紀まではその機が熟さなかったと言うことか。だとしてもネパールの木版印刷がチベットに由来することは確かだ。

以上、ネパールの製紙、紙写本形態、木版印刷においてチベット文化の影響が大きいことを説明した。これらの点ではかつて圧倒的だったインドの文化的影響は目立たない。

おわりに

アーシャ・アーカイブズ所蔵資料の調査及び文献・目録調査により、幾つかの点を議論してきた。テーマが幾分、拡散したので、以下、主要な点を簡条書きにまとめておく。

- ネパールには歴史の早い時期にインドから仏教とともに写本文化が伝播した。カトマンズには5～7世紀頃のものとする仏教写本が残されている。
- 初期の写本支持体はヤシの葉で、それに竹（あるいは木）ペンでペン書

きした。

- 使用されたヤシ種は、宗教写本等には薄く、柔軟で保存性のよいコリハヤシ。世俗文書等にはパルミラヤシの葉も用いられたと考えられる。
- コリハヤシの葉もパルミラヤシの葉もインドから輸入した。ネパールにパルミラヤシを産する地域があるが、その地でヤシの葉支持体を調製した痕跡は見当たらない。
- 支持体ヤシの葉の横幅は12世紀以降短くなる傾向が見られる。その理由はヤシ種あるいは素材の変化によるのではなく、読み易さ、扱い易さなどの機能的要件による変化と想定する。機能性を考慮し、ヤシの葉半葉からのシート作成数を増やした。
- ヒマラヤ南麓（現ネパール領）にはおそらく最初の千年紀にチベットから製紙技術が伝播した。製法は製紙技術の祖型に位置する澆紙法で、紙料素材はダフネが主流である。
- しかしネパールで紙を一般の支持体として用い始めるには16世紀で、紙使用がヤシの葉使用を数量的に凌駕するのは17世紀になってからである。
- 16世紀～17世紀に支持体がヤシの葉から紙に変遷した理由は、インドからのヤシの葉調達が困難になったからと推測する。ヤシの葉が調達できた間はヤシの葉が支持体で、それができなくなったとき初めて、紙をその代用品として使用した。
- ヤシの葉から紙へと支持体が移行した際、ネパールはチベットの紙写本文化を摂取した。イスラム化したインド文化の影響はこの点では目立たない。
- ネパールにはタムスク、細折書簡など史料的価値が高く、かつ形態的に興味深い記録写本が存する。
- タムスクの素材はヤシの葉、それもヤシの葉から支持体シートを採取した残り片の活用ではないか。
- タムスクの形態及び付された粘土印章はインドの文書文化に由来する可

能性がある。この点は今後の研究課題である。

既に記したとおり、ネパールで使用された支持体ヤシの葉の種別については実地調査を十分にできなかった。アーシャ・アーカイブズさらには国立公文書館所蔵写本等も対象に実見調査がなされればと思う。一方、NGMCPの目録作成作業は未だ途上であり、その進捗をみて、再度、ヤシの葉と紙使用の時代性調査などがなされるべきと考えている。

加えて、ネパール製紙業の起源、16世紀以前に生産された紙の用途、ヤシの葉が紙に変遷したことの文化的社会的影響、巻き型写本の起源などが研究課題としてある。これらについて識者が研究を進められ、成果・知見を披露して下さることを希望している。

上記はネパールのみならずアジアの文化史において重要である。ネパールはインドとチベットの文化を摂取しながら独自の写本文化を発展させ、今に残している。ケース・スタディ的に見ても貴重である。南アジアのインド、ネパール、スリランカ3か国の支持体事情のみを比較しても、イスラム文化の影響を受けてヤシの葉から紙へと移行したインド、ヤシの葉調達が困難になりチベット紙写本文化を受容したネパール、20世紀までヤシの葉使用が続いた仏教国スリランカ、と顕著な違いがある。この領域で、一層の調査・研究が必要とされることが理解されよう。

さいわい、NGMPP / NGMCP 及びアーシャ・アーカイブズ所蔵資料データベース化等によってネパール写本への目録・資料アクセスの便が向上してきている。それらも活用され、研究が進展することを期待したい。

筆者は図書館・アーカイブズの資料保存を専攻する者で、ネパール写本に対する関心もそれに拠る。一方、ネパールの歴史、文化、言語に関する素養は極めて乏しい。ために本稿には不備な点が多々あることと思料している。識者のご批正、ご鞭撻をお願いしたい。

付記：ネパールでの写本調査に当たり、仏教資料文庫の高岡秀暢氏と東豊久氏、アーシャ・アーカイブズのRaja Shakya 館長とSharad Kasa 氏、ロータス研究センターのManik M. Vajracharya 氏から格別のご支援を得た。また小西正捷氏(インド研究者)、吉崎一美氏(ネパール仏教研究者)、高木直子氏(アジア文化財保存修復会)、田之上繁氏(仏教資料文庫)、Dr. Albrecht Hanisch (Nepal Research Center) から貴重なご教示を得た。記して各氏に深甚の謝意を表します。

注

- 1) 安江明夫「ヤシの葉写本研究ノート」『学習院大学文学部研究年報』第57輯、p.105-140。
- 2) ネパール・ドイツ写本保存プロジェクトについては、田中公明、吉崎一美『ネパール仏教』春秋社、1998、p.106-109。及び同プロジェクト・サイト http://www.uni-hamburg.de/ngmcp/index_e.html を参照のこと。
- 3) NGMCP 目録データベースはインド語系写本とチベット語系写本に分かれる。目録作成はインド語系写本から着手しており、2011年8月時点ではチベット語系写本の目録記載はない。目録データベース・サイト：<http://134.110.72.204:3000>
- 4) 2011年8月22日～31日の同日録データベース検索による。なお写本1点に複数の内容が含まれる場合、NGMCP 目録データベースは内容(タイトル)別に副出している。そのため写本数はタイトル数より少ない。本稿では目録検索数(タイトル数)は「件」、写本数は「点」の単位で表す。
- 5) Lotus Research Center ホームページ (<http://www.lrcnepal.org>) から目録データベースを検索できる。筆者の同データベース検索は2011年8月8日～12日。以下でも検索可能。http://archive.ub.uni-heidelberg.de/savifadok/volltexte/2010/1397/pdf/ASK_Catalog_optimized.pdf
- 6) Matsuda, Kazunobu. Two Sanskrit Manuscripts of the Dasabhumikasutra Preserved at the National Archives, Kathmandu. Center for East Asian Cultural Studies for Unesco, Toyo Bunko, 1996, p. xi-xii.
- 7) Trier, Jesper. Ancient Paper of Nepal. Jutland Archaeological Society Publications. 1972. p.49.
- 8) 筆者は資料保存コンサルタントとしてネパールを訪問し、2010年12月はA Seminar on Preservation of Documentary Heritage and Its Access in Nepal で “What is past is prologue: On the preservation of documentary heritage.”、2011年4月はFifth International Conference on the Buddhist Heritage of Nepala-Mandala – 2011 で “Buddhist manuscripts heritage in Nepal: A Preservation consultant’s view.” の講演を行った。後者は会議録(Lotus Research Center 編、2012年刊予定)に所載。
- 9) 田中、吉崎(注2) p.111-115。を参照のこと。
- 10) 仏教資料文庫については同文庫ホームページ <http://www.aioiyama.net/bl/index.html> 及び高岡秀暢「母なるネパール仏典守る」『日本経済新聞』2010.12.10。を参照のこと。
- 11) Lotus Research Center (注5) 参照。
- 12) 田中、吉崎(注2) p.112.
- 13) アーシャ・アーカイブズ職員説明による。(2011.4.27)
- 14) Hoernle, A.F.R. “An Epigraphical note on palm-leaf, paper and birch-bark.” Journal of Asiatic Society of Bengal. vol.69, 1900, p.95.
- 15) Hoernle (注14) p.99-104. 長さは元表 inch 表示を cm に換算した。

- 16) Min Bahadur Shakya. "Preservation of Sanskrit Buddhist manuscripts in the Kathmandu valley: Its importance and future." <http://Pnclink.org/annual/2000> (参照 2011.9.22)
- 17) Naoko Takagi et al. "Conservation and digitisation of rolled palm leaf manuscripts in Nepal." <http://www.asianar.com/articles/tamsuks/index.html> (参照 2011.8.31)
- 18) 安江 (注 1) p.125-126.
- 19) 田中、吉崎 (注 2) p.95.
- 20) Hoernle (注 14) p.97.
- 21) ネパール暦の西暦換算は NGMCP 及び小西正捷「ネパールの手漉き紙」『季刊民族学』no.21, 1982, p.49. に倣い、便宜、ネワール暦 (+ 880 年)、ヴィクラム暦 (- 57 年)、サカ暦 (+ 78 年) とした。
- 22) 小西 (注 21) p.49. 小西が書体から 10 世紀紙写本と推定した標本は表に加えていない。
- 23) Hoernle (注 14) p.99-104.
- 24) NGMCP データベースの素材別カテゴリーは扱いが難しい。ここでは紙支持体として「折本(folded books)」「印刷書(printed books)」「紺地金泥写本(milapattra)」「巻き型紙写本(rolled paper)」データを合計した。折本が大部分(約 96%)を占める。なお NGMCP はケーシャ図書館所蔵写本を含み、アーシャ・アーカイブズ所蔵写本を含まない。
- 25) Trier (注 7) p.130.
- 26) 小西 (注 21) p.49.
- 27) アジア文化財保存修復会「ネパール貝葉写本の保存修復とデジタル化事業」<http://www/hozon.co.jp/> (参照 2011.8.31)
- 28) 田中、吉崎 (注 2) p.113.
- 29) Nepalese Manuscripts. Described by Siegfried Lienhard. Fanz Steiner Verlag Wiesbaden GmbH, 1988, p.173-198.
- 30) 厚さ測定はマイクロ・メーターによる。先稿(「ヤシの葉写本研究ノート」)の実測値はノギスによる。葉の厚さをマイクロ・メーターは点で測定し、ノギスは凹凸含む線で測定する。ゆえにマイクロ・メーターはノギスより小さい測定値を示す。
- 31) NGMCP データベースはテライ地方で使用された bhujapattra (樹皮写本) 344 件の目録データを所載する。
- 32) 少数だが蟬印章も見られる。
- 33) 新関欣哉『東西印章史』平文社、1993, p.126.
- 34) Thaplyal, Kiran Kumar. Studies in Ancient Indian Seals, Akhia Bharatiya Sanskrit Parishad, 1971, p.13-14.
- 35) Thaplyal (注 34) Plates. 等を参照のこと。
- 36) Losty, Jeremish P. The Art of the Book in India. British Library, 1982, p. 10. 等参照。
- 37) The Journal of the Numismatic Society of India, vol. 26, 1964, Plate.VIII.
- 38) 同上, p. 220.
- 39) 山崎利男「インドの銅板文書の形式とそのはじまりについて」『東洋文化研究所紀要』no. 73, 1979, p. 182. 三田昌彦「12・13 世紀北インドの村落下賜文書」『名古屋大学東洋史研究報告』vol.25, 2001, p. 360. 等による。
- 40) Thaplyal (注 34) p.12.
- 41) Hoernle (注 14) p.122.
- 42) 小西 (注 21) p.42. による。
- 43) 小西正捷「インドの古文書料紙と製紙技術の成立」『東南アジア・インドの社会と文化』上巻、1980. 等を参照した。
- 44) ウー・トーカウ「失われた宝石ーミャンマーの貝葉文書、折り畳み写本の収集、保存とテキスト研究」『史資料ハブ 地域文化研究』no.9, 2007, p.34.
- 45) チベットへの製紙技術伝播は『旧唐書』「641 年にチベットに降嫁の中国・文成公主は製紙工などを同行した」により 7 世紀半ばとするのが一般的。ここではそれに従った。

ヤシの葉から紙へ (安江)

- 46) 澆紙法については、久米康生『和紙づくりの歴史と材料』岩田書店、2008、p.9-14。小林良生「中国周辺の少数民族の抄紙法から見た『澆紙法』発達過程の考察」『科学史研究』vol.43、2004、p.193-203。を参照のこと。
- 47) 池田巧ほか『活きている文化遺産 デルゲバルカン』明石書店、2003、p.205-207。及び潘吉清『中国製紙技術史』平凡社、1980、p.242-243。による。潘は瑞香狼毒のほか灯台樹皮などを挙げている。
- 48) Trier (注7) p.30-31.
- 49) 中世期ネパールにおける支持体以外の用途（美術工芸、衣類、包装、内装等）での紙使用の有無については調査が必要である。
- 50) 今枝由郎『ブータン—変貌する仏教王国』大東出版社、1994、p.166.
- 51) インドでもヒマラヤ山麓のシッキムなどではダフネを紙料に澆紙法で製紙した。久米康生(注46) p.244-245等を参照のこと。
- 52) チベット写本に関する考察は国際敦煌写本プロジェクト (International Dunhuang Project) データベースによる。同プロジェクト・サイト：<http://idp.bl.uk>
- 53) 小西 (注21) p.48。及び Masatoshi A. Konishi. "Old paper used for the Asutosh Museum Manuscript of Pancarasa." 『南アジア研究』no.2, 1990, p.145-146。による。
- 54) 写本対象の NGMPP / NGMCP は通常の刊本（活版印刷本）は含まないと推察する。但し詳細は不明。
- 55) D. スネルグローブほか (奥山直司訳) 『チベット文化史』春秋社、1998、p.181。伏見英俊「蔵外文献木版印刷についての考察」『日本西蔵学会会報』no.48, 2002, p.51.
- 56) I. デンデリ (薬師義美訳) 『チベットの報告2』平凡社、1992、p.205.

(人文科学研究科アーカイブズ学専攻 非常勤講師)